

共同研究 ● 朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究 (2009-2012)

私たちは、今、なぜ、「北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)」の文化人類学的研究を始めようとしているのか。

1つの背景として、世界各地を研究対象とする文化人類学という学問分野は、人間の文化についての普遍的な洞察はもちろん、各地の民俗文化に関する個別的な見地を蓄積することによっても、広く社会に貢献してきた。そこで、これまで欠落してきた「北朝鮮」の民俗文化を研究対象とすることで、この地域の人々の暮らし方や考え方を知り、文化人類学の蓄積をさらに補完するという単純かつ純粋な思いからである。

もう1つは、日本の人文学界において「北朝鮮」研究は等閑視されている現実があり、これに対し私たちはまともに立ち向かっていかなければならないという切実な思いからである。私たちのメンバーの1人、伊藤亜人は2010年1月30日に開催された早稲田大学アジア研究機構特別企画シンポジウム「北朝鮮民衆の日常～生活者の声を通して～」で、北朝鮮研究にあたって「東アジアの視野と長期的展望」「国家的マクロ・アプローチの限界」「問題の同定・主体の同定」「実践志向型研究(Practice-oriented Research)」「方法としての生活者の視点」という問題提起と文化人類学的研究の有用性を鼓舞している。私たちもこれに応じて民博の共同研究として「北朝鮮」をどのように研究するか模索し、実際に研究を遂行していかなければならないと考えている。

わが国では、朝鮮半島の民俗学・民族学的研究は、植民地期においては活発になされたが、戦後は空白期を迎えた。しかし、1965年に日韓修好条約が結ばれ、1970年代から韓国社会での文化人類学的な研究が行われるようになった。そして、民博では1980年から韓国社会に関わる共同研究会を8回にわたって開催してきた。その第1回目の趣旨は、「わが国における韓国文化の研究は、最近、活発になっているが、これまで日韓両国の研究者間の連絡は、あまり行われていなかったという問題意識にある。民博をわが国に



北朝鮮人観光客(咸鏡北道七宝山にて、撮影：韓景旭)。

おけるこの分野の研究センターとし、従来の文化人類学的研究についての文献目録を作成・整理し、今後の研究方向をみいだしてゆくことを目的とする」ものであった。それから30年経った今、1980年当時とは、文化人類学をめぐる社会的環境が大きく変わっており、他の学問分野も広く視野に入れておかなければならないが、この共同研究会は、これまでの民博の韓国研究を引き継ぎつつ、まずは3年半の期間を使って、あらためて北朝鮮に焦点をあてた文化人類学的研究を開始させようとするものである。

現在学としての文化人類学は、国家としての北朝鮮の社会や文化の研究も避けて通れない。しかし、北朝鮮建国以来、すでに60余年間にわたって現地調査が行えなかったうえ、今後しばらくの間も現地に出向いての調査研究は困難な状況にある。

そこで、本研究の対象は「北朝鮮」ではなく「朝鮮半島北部地域」とした。その理由は、民俗文化は

現在の国家としての北朝鮮に地域的にも時代的にも限定されずに存在するからである。すなわち北は鴨綠江、豆満江、南は38度線によって明確に区切られた地域ではなく、時代も北朝鮮という国家が成立した1948年以降に限定されていないからである。研究対象とする時代的、地域的設定を、少し長く、広く考えることにした。

そのうえで、本研究会では、この地域の民俗文化の研究を、次の3つの方面から模索することから始めた。

1つ目は、やはりともかく行って見ることである。共同研究会のメンバーの内の何人かは、実際にこの地域に行ってきたので、映像資料を使って、その報告がなされた。2005年10月の平壤・南浦・開城などへの訪問、2006年6月の平壤と平安南道肅川郡への訪問、2009年夏の清津・鏡城への訪問によるものである。また、中国人観光客は北朝鮮を訪問でき、彼らが撮影した写真がインターネットに載せられている。百聞は一見に如かず。これらの報告は、この地域の現在の状況を知るには有用であった。

2つ目は、日本および海外における北朝鮮研究者との情報交換である。必要に応じて、日本国内にいる政治・外交・



民宿村(咸鏡北道七宝山第一宿泊施設、撮影：韓景旭)。

経済などの分野で北朝鮮をあつかう研究者や、学界外の北朝鮮を研究する方々も特別講師として招くが、まずは韓国、中国、ロシア、モンゴル、合衆国などで、北朝鮮の民俗文化についての研究がどのように展開しているかを調査する予定である。

これまでにメンバーの3人が韓国に行き、統一院のチョ・ジョンア研究員、慶南大学のイ・ウヨン教授、東国大学のホン・ミン教授、梨花女子大学のキム・ソッキャン教授など、北朝鮮関

係の研究者と面談し、統一院では統一教育院が2000年代前半に制作した「北朝鮮を知る映像教材シリーズ」のうち「北朝鮮の選挙制度」「北朝鮮住民の結婚と家庭生活」「北朝鮮住民の組織生活」「北朝鮮の教育制度」という映像資料を入手した。

3つ目は、文献研究である。北朝鮮で刊行された図書、新聞、機関誌などがある。日本にも、北朝鮮が成立する以前、植民地期に作られたこの地域の民俗文化に関する資料がある。日本人によって1945年までに行われた民俗調査の結果を再検討することによって、現代文化との間の連続性や断絶性の問題を明らかにできよう。また、韓国をはじめ周辺国家でも北朝鮮の民俗文化に関する先行研究も少なからず出版されており、これらを通じた基礎的研究が可能である。これらの先行研究を整理・分析し、文献リストを作成し、研究動向を把握するとともに、それらの中から必要な文献を選定し日本語に翻訳し、アンソロジーを組み立て、出版することも考えている。

これまでのところ、民博図書室にある関連図書の検索、および各自が持っている関連図書の整理から文献リストの作成に着手した。そのなかから、まずはイ・キチュン他『統一に先だつて見る北朝鮮の家庭生活文化』（ソウル大学校出版部、2001年）を分担して翻訳する作業にとりかかっている。また、共同研究会において、主体思想が確立する以前の1950年代末から60年代初にかけて北朝鮮科学院で刊行された民俗学関係研究書の分析についての発表があったが、そこからは社会主義建設の具体的で現実的な課題の中で北朝鮮民俗学の基礎が整えられ、今日にまで持続していることが読み取れた。この問題は北朝鮮が独自の社会主義体制のもとでどのように民俗文化を醸成してきたかという問題につながるだろう。

上記3つの研究を遂行していくために、今回の共同研究会のメンバーは、主として韓国社会とあわせて海外コリアンの研究を行っている文化人類学者に集まってもらった。これらメンバーのもつ力を結集させていくことで、いくつかの利点をもつと考えている。



清津製鉄所付設幼稚園の子どもたち（撮影：韓景旭）。

第1に、北朝鮮研究における文化人類学的視点の有用性である。伊藤の指摘にもあるように、北朝鮮社会は今日、国家としての政治、経済が破綻してきている。そこでは制度や観念からだけではなく、日常の経済活動といった実態からの、人間の生活が見えるミクロな視点からの分析を求めることができよう。

第2に、韓国社会との比較研究である。メンバーが韓国社会でこれまで蓄積してきた知見と北朝鮮社会の民俗文化に関する知見をつきあわせることで、共通点と相違点が明らかになる。それは朝鮮半島の南部と北部という地域的な比較とともに、国家体制の変化と民俗文化の関係についての文化人類学的な議論に寄与することもできよう。

第3に、海外コリアン研究とのリンクがある。メンバーは、脱北者や在日朝鮮人の研究をする者、中央アジア、沿海州、サハリン、中国などで海外コリアンの調査をしている者で構成している。これらの地域では、北朝鮮出身者からの聞き取り調査が可能である。さらに、韓国と北朝鮮の双方と国交を結んでいるモンゴル研究者にも加わってもらった。

この地域の焦眉の課題は、こうした基礎的研究ではなく、飢餓、人権、拉致といった現在進行中の北朝鮮の不幸な「実態」ではないかと批判されるかもしれない。私たちの研究も、時々刻々と変化していく北朝鮮情勢と無関係でないことはいままでもない。体制の変化を含め、いつ北朝鮮の情勢が変わるかもわからない。それでも、いや、それだからこそ、この地域においてフィールドワークができるようになるまで、目線は低く民衆に向け、アンテナを高くして情報を収集しつつ、できることから地道な作業をすることで、「北朝鮮」の民俗文化に関する基礎的研究を始動しようと考えている。

あさくら としお

文化資源研究センター教授。編著に『変貌する韓国社会：1970～80年代の人類学調査の現場から』（嶋陸典彦と共編 第一書房 1998年）、『グローバル化と韓国社会：その内と外』（岡田浩樹と共編 国立民族学博物館調査報告69 2007年）など。